〔研究ノート〕

ゼノンのパラドックスについて（2）承前

瀬　戸　一　夫

第 3 節　直説法の未来時制で表される根拠ないし理由

シンプリキオスは第 1 節で解読した断片を引用した直後に、やや詳しい説明を追加しているので、前節までの検討から読み取った内容と整合するか否かを点検するために、本節ではまずその説明箇所を訳出して確認することにしたい。

LM, R12 Simpl. *In Phys.*, 139. 15–23.
καὶ ταῦτα οὐχὶ τὸ ἕν ἀναιρῶν ὁ Ζήνων λέγει, ἀλλ᾽ ὅτι μέγεθος ἔχει ἕκαστον τῶν πολλῶν καὶ ἀπείρων τῷ πρὸ τοῦ λαμβανομένου ἀεί τι εἶναι διὰ τὴν ἐπ᾽ ἄπειρον τομήν· ὅ δείκνυσι προδείξας ὅτι οὐδὲν ἔχει μέγεθος ἐκ τοῦ ἕκαστον τῶν πολλῶν ἑαυτῷ ταὐτὸν εἶναι καὶ ἕν. καὶ ὁ Θεμίστιος δὲ τὸν Ζήνωνος λόγον ἓν εἶναι τὸ ὂν κατασκευάζειν φησὶν ἐκ τοῦ συνεχές τε αὐτὸ εἶναι καὶ ἀδιαίρετον· εἰ γὰρ διαιροῖτο, φησίν, οὐδὲ ἔσται ἀκριβῶς ἓν διὰ τὴν ἐπ᾽ ἄπειρον τομὴν τῶν σωμάτων. ἔοικε δὲ μᾶλλον ὁ Ζήνων λέγειν ὡς οὐδὲ πολλὰ ἔσται.

また、ゼノンは一なるものを排斥して、これらのことを述べているのでは毛頭なく、果てしない分割によっても常に、取り除かれる〔取り除きを被る〕ものの前方には、いく分か〔の大きさ〕が存在しているという

仕方で、多かつ無限のものども〔複数形〕のいずれも大きさをもつと述べているとはいえ、かれはこのことを、多〔複数形〕のいずれもそれ自身と同じ一つのものであるから、まったく大きさをもっていないと、あらかじめ示したうえで論証しているのである。さらに、テミスティオスが述べるところによると、ゼノンの議論は存在しているものが連続的で分割されないことにもとづいて、存在しているものを一なるものとしている。というのも、仮に存在しているものが分割される〔希求法現在〕のであれば、諸事物の果てしない分割によって、存在しているものが厳密には一なるものでないことになる〔直説法未来〕と、かれは述べているからである。しかし、ゼノンはむしろ、多〔複数形〕が存在しないことになる〔直説法未来〕と言っているように思える。

原文２行目の定冠詞《*τῷ*》は、直後から３行目までの不定詞句《*πρὸ…εἶναι…τομήν*》に冠されており、この句が与格で道具、手段、あるいは方法を表すようにしている。これは「格の特殊用法」とも呼ばれる与格の用例であるが、ギリシア語の定冠詞は名詞だけでなく、文をも含むあらゆる語句に冠されうるため、不定詞句を与格にして用いるこの種の表現が可能なのである。したがって、この箇所は訳文の２行目から４行目にわたる「果てしない…いく分か〔の大きさ〕が存在しているという仕方で」と読める。しかし、文法上の問題はともかく、語られている内容に目をむける必要がある。

まず、細部を度外視した全体の趣旨として、ゼノンの攻撃的な推論は一なるものを標的にしているというより、一貫して多（複数形）の存在を標的にしている。シンプリキオスはこう説明していると理解してよいだろう。次に、説明の前半で「取り除かれるもの」が問題にされている点は、第１節で解読を試みた著作断片がシンプリキオスの念頭にあること、さらに「果てしない分割」や「前方には、いく分か〔の大きさ〕が存在している」などに着目すると、かれが第２節で検討した著作断片の論証に依拠していることを窺わせる。そして、かれによると、ゼノンは「多かつ無限のものどものいずれも大きさをもつ」と述べていたのである。ここまでは前節まで解読した内容と齟齬はない。しかし、以上に続く「かれはこのことを、多〔複数形〕のいずれもそれ自身と同じ一つのものであるから、まったく大きさをもっていないと、あらかじめ示したうえで論証している」

を、どのように理解すればよいのだろうか。いずれの多（複数形）も例外なくそれ自身と同じ一つのものである場合、なぜ多はまったく大きさをもっていないのか、少なくともこの箇所でシンプリキオスが説明していることを、単に辿るだけではまったく不明というほかない。ことによると、すでに検討ずみの断片に、関連する議論があったのかもしれない。

本研究ノートの第 2 節で解明したことの繰り返しになるが、ゼノンの論証形式に従えば、複数形の多（全体）を構成する個々の要素（部分）として、全体よりも小さくなければならない単数形の多は、二分割されるさなかで、それ自身の構成要素（部分）よりも大きくなければならない複数形の多（全体）である。しかも、このことは前と後および以前と以後が相対化されて、一方に対する他方の優越性が否定されるため、両側にむけて対等かつ双方向的に成り立ち、絶え間なく継起する二分割の「真っ只中にある」一部分なのであった。複数形の多（全体）を構成する個々の要素（部分）は、こうした現在時制のアスペクトで「分割されている」のであるから、もしも多（複数形）が存在しているのであれば、同じその多（複数形）は際限なく分割されてきているものとして、大きさが無いほど小さく、これからも際限なく分割していけるものとしては無限であるほど大きくなければならない。そして、この不条理を避けるためには、分割して生じる部分の大きさが、分割に先立つ全体の大きさと変わってはならないのである。したがって、多（複数形）は二分割の前と後で、少なくとも大きさに関するかぎり、同じものでなければならなかった。ところが、分割しても大きさが変わらないのは、もともと大きさをもたないものだけであるから、多（複数形）は大きさをもたないのでなければならなかったのである。推定とはいえ、以上のように再現される議論は、ここで問題にしているシンプリキオスの説明、すなわち「多〔複数形〕のいずれもそれ自身と同じ一つのものであるから、まったく大きさをもっていない」と整合ないし共鳴するのではなかろうか。

次に、説明の後半では、4 世紀のアリストテレス注釈者、テミスティオス[(4)] の見解に論及されているので、その内容と論及の意図についても考えてみたい。かれの理解によると、ゼノンは存在しているものが「連続的で分割されない」ことにもとづいて、存在しているものを「一なるものとしている」のである。テミスティオスはそのように理解する理由ないし根拠も述べていた。「仮に存在しているものが分割される〔希求法現在〕の

であれば、諸事物の果てしない分割によって、存在しているものが厳密には一なるものでないことになる〔直説法未来〕」。シンプリキオスによると、これがその理由ないし根拠にほかならず、希求法現在の条件節をもつ条件文で表現されている。この形式をとる条件文は多くの場合、条件節だけでなく帰結節も希求法で、しかも帰結節に小辞《*ἄν*》を伴い、実現する可能性があまりない未来を仮定する。たとえば、プラトンの対話篇『ゴルギアース』には、次のような台詞が見られる。

Plat. *Gorg.*, 469c.
εἰ δὲ ἀναγκαῖον εἴη ἀδικεῖν ἢ ἀδικεῖσθαι, ἑλοίμην ἂν μᾶλλον ἀδικεῖσθαι ἢ ἀδικεῖν.

仮に不正を為すか不正を被るか、いずれか一方が避けられない〔希求法現在〕のであれば、わたしは不正を為すよりも、むしろ被ることを選ぶであろう〔希求法現在〕。

これに対して、テミスティオスが示していたと指摘されている理由（根拠）は、希求法現在の条件節と直説法未来の帰結節を組み合わせた条件文で表現されている。たしかに、これと同じ組み合わせの用例は、プラトンの対話篇『メノーン』や、古くはホメロス（ホメーロス）の叙事詩にも見られると指摘されているが(5)、通常の組み合わせでないこともまた事実である。そこで、ゼノンの論証がどのような特徴をもっていたのか、再び振り返ってみよう。

まず、第１節で解読した著作断片には、以下のように記されていた。「また、取り除かれていても他方〔取り除きを被っている側〕がより小さくならず〔直説法未来〕、さらには、付け加えられていても、他方〔付け加えを被っている側〕が増大することにならない〔直説法未来〕のであれば、付け加えられているものも取り除かれているものも、まったく存在していなかった〔直説法不完了過去〕ことは明らかである」。ゼノンはこの断片で、必然的に導かれる未来の事柄を根拠ないし理由に、かつて継続していた事態のなかで、付け加えられているものと取り除かれているものが存在していたことを否定している。さらに、第２節で解読を試みた著作断片では、根拠ないし理由を示す文脈で「というのも、それ〔前方に大きさ

をもっているもの〕に属する、そのような終端は存在しないことになり〔直説法未来〕、また一方の側にとって他方の側が存在しなくなる〔直説法未来〕こともないからである」と語られていた。ゼノンの論証では、このように、未来にもたらされる事柄の必然性が根拠ないし理由とされていたのである。

以上をもとに推理すると、テミスティオスはゼノンの著作から、直説法の未来時制で表現された論証を、おそらく正確に読み取っていた。その一方で、存在しているものが一なるものであるならば、もはや実現の可能性がほとんどなくなる仮定を、すなわち「存在しているものが分割される」という仮定を、希求法現在時制の条件節によって表現したのではないだろうか。もしもこのとおりであったとすると、ギリシア語の母語話者やその言語に馴染んでいる者にとって、希求法の現在時制で語られていた「存在しているものが分割される」という前提は、ほとんど実現しえないのであるから、その前提を否定した「存在しているものは連続的で分割されない」ことにもとづいて、テミスティオスがゼノンの議論を解釈していると自然に読み取れたであろう。おそらくは、シンプリキオスもまた、テミスティオスが述べていることをそのように読み取ったに違いない。だからこそ、かれは「テミスティオスが述べるところによると、ゼノンの議論は存在しているものが連続的で分割されないことにもとづいて、存在しているものを一なるものとしている」と判断したのである。かれはその判断をもとに、テミスティオスと同じく、ゼノンに特徴的な未来時制で、独自の解釈を対比的に示していた。「しかし、ゼノンはむしろ、多〔複数形〕が存在しないことになる〔直説法未来〕と言っているように思える」。

もちろん、ここで試みた推理は、テミスティオスがゼノンの議論を上述のとおりに読み取り、また読み取った内容をシンプリキオスが正確に伝えているのでなければ成り立たない。しかし、少なくとも、テミスティオスが伝えるゼノンの議論に言及したシンプリキオスの説明には、前節までの検討をもとに浮かび上がらせたゼノンの論証形式についての解釈が、即座に無効なものとして棄却されなければならないような要素は見当たらないといってよさそうである。いずれにせよ、現存する他の断片とも齟齬がないか、まだ慎重に調べなければならない。そこで、かれの著作断片をさらに解読しながら、解釈の前進に努めることにしたい。

第４節　多の数的な無限性と二分割にもとづく論証

ゼノンが用いている論証の形式は、必然的に導かれる未来の事柄にもとづいて、現在時制で表現される「今この瞬間」に進行中の何かが否定される、あるいはまた、現在時制で表現されていることが根拠づけられ、そのことが実情と照合されるという一種独特のものであった。第２節で検討した著作断片でも、前方に大きさをもっているものは、それ自身の大きさのいく分かを前方にもっていることに必ずなるのであるから、論証にあたって現にこれを「一度だけ」言う実情と照らし合わせて、これを「一度だけ言うのと常に言っているのとはまったく同じことである」という考え方の有効性が示されていたのである。

たしかに、論理の形式だけを問題にすると、ゼノンが行なっている論証は悪しき循環論法だと思えるかもしれない。というのも、かれは「一度だけ言うのと常に言っているのとはまったく同じことである」という思考様式にもとづいて、前方に大きさをもっているものについて必然的に成り立つことになる未来の事柄を導き、それを根拠にして当の思考様式が有効であると判定しているからである。この問題点はまた、論証のなかで、前方に大きさをもっているものについて一度だけ言うことが、現在時制のアスペクトで成り立つ事実に依拠しても、けっして解消されないのではないかと考えられる。とはいえ、たとえばニュートン力学の第一法則は、より基礎的な原理から導かれるため有効とされているのではなく、当の第一法則にもとづいて演繹される力学的現象のメカニズムが、現に様々な事実と体系的に合致し、ときには常識に根を張っている誤解に気づかせる他、まだ知られていない現象の予測まで可能にするからこそ、有効であると理解されているのである。それゆえ、ゼノンが著作断片のなかで定式化していた現在時制の思考様式（アスペクト）は、ニュートン力学の第一法則と同じ性格のものであると理解すれば、循環論法として棄却したくなる第一印象もかなり緩和されるだろう。

しかし、現存する著作断片のなかには、必然的に導かれる未来の事柄が現在を評価するための根拠や理由にされていない、少なくともそのような根拠や理由にされているとは思えないものもある。次にその断片を読み解くことにしたい。なお、最後の［　］内は、DK からの引用である。

DK, B3 Simpl. *In Phys.*, 140. 27.
καὶ τί δεῖ πολλὰ λέγειν, ὅτε καὶ ἐν αὐτῷ φέρεται τῷ τοῦ Ζήνωνος συγγράμματι ;

ゼノンの著作そのもののなかでも述べられているときに、なぜまた多くを語らなければならないだろうか。

DK, B3; LM, D11 Idem, *ibid.*, 140. 28–33.
πάλιν γὰρ δεικνύς ὅτι εἰ πολλά ἐστι, τὰ αὐτὰ πεπερασμένα ἐστὶ καὶ ἄπειρα, γράφει ταῦτα κατὰ λέξιν ὁ Ζήνων· "εἰ πολλά ἐστιν, ἀνάγκη τοσαῦτα εἶναι ὅσα ἐστὶ καὶ οὔτε πλείονα αὐτῶν οὔτε ἐλάττονα. εἰ δὲ τοσαῦτά ἐστιν ὅσα ἐστί, πεπερασμένα ἂν εἴη. εἰ πολλά ἐστιν, ἄπειρα τὰ ὄντα ἐστίν. ἀεὶ γὰρ ἕτερα μεταξὺ τῶν ὄντων ἐστί, καὶ πάλιν ἐκείνων ἕτερα μεταξύ. καὶ οὕτως ἄπειρα τὰ ὄντα ἐστί". [*καὶ οὕτως μὲν τὸ κατὰ τὸ πλῆθος ἄπειρον ἐκ τῆς διχοτομίας ἔδειξε.*]

というのも、多〔複数形〕が存在しているのであれば、それらは有限かつ無限であることを再び論証しながら、ゼノンはそれらのことを、次のような言い方で書き記しているからである。「もしも多〔複数形〕が存在している〔直説法現在〕なら、それらは存在している数だけ存在している〔直説法現在〕のであり、それら自身より多くも少なくもないのでなければならない。そして、存在している数だけ存在している〔直説法現在〕のであれば、それらは有限であるだろう〔希求法現在〕。もしも多〔複数形〕が存在している〔直説法現在〕のであれば、存在しているものども〔複数形〕は無限である〔直説法現在〕。なぜなら、存在しているものどもの間には、常に他のものどもが存在し、また、それらの間にも再び、他のものどもが存在している〔直説法現在〕からである。そして、このように、存在しているものどもは無限である〔直説法現在〕」。［かれはこうして、数的無限もまた、二分割にもとづいて論証した。］

断片全体で、希求法が用いられているのは、小辞《*ἄν*》を伴った原文 4 行目の一箇所だけであり、もしも多が「存在している数だけ存在している

のであれば」という仮定によって起こりうること、すなわち「それらは有限であるだろう」という未来の可能性が現在時制で語られている。しかし、この一箇所を除くと、どの文も直説法の現在時制であり、条件文はすべて実現の可能性を問題にしない単なる仮定になっている。しかし、ゼノンはこの断片で、一種独特の論証形式と無縁の議論を展開しているのだろうか。この点を明らかにするためには、議論の形式を調べるだけではなく、その内容をできるだけ正確に読み解かなければならない。

まず、複数形の多が有限であることを論証する断片前半は、分かりにくさも微妙さもなく、記されている文言どおりに理解できる。「多〔複数形〕が存在しているなら、それらは存在している数だけ存在しているのであり、〔…〕存在している数だけ存在しているのであれば、それらは有限であるだろう」。注意が必要なのは、第２節までと異なって、上掲の著作断片が多や存在しているものどもの「大きさ」ではなく、それらの「数」を問題にしている点である。断片後半も一貫して数を問題にしており、対象範囲を多（複数形）から存在しているものども一般へと拡大して、そもそも後者が例外なく無限であると主張した後もまた、あくまでもこの主張を存在しているものども一般の範囲で根拠づけている。念のため確認しておくと、その根拠（理由）は、次のとおりである。「なぜなら、存在しているものどもの間には、常に他のものどもが存在し、また、それらの間にも再び、他のものどもが存在しているからである」。はたして、この根拠（理由）は、即座に納得できる内容だろうか。

第２節で扱った著作断片と同様、ごく普通に理解しようとすると、根拠（理由）と根拠（理由）づけられる事柄が逆になっているとしか思えない。存在しているものどもが、例外なく、数的に無限であるという理由で、あるいはそのことを根拠に、存在しているものどもの間には、常に他のものどもが存在し、それらの間にも再び、他のものどもが存在している、と主張できるのではないだろうか。しかも、不可解なのはこれだけでなく、シンプリキオスの指摘によると、ゼノンは「こうして、数的無限もまた、二分割にもとづいて論証した」のである。二分割はこれまで大きさを二つの部分に分けることであった。ところが、ゼノンはその二分割にもとづいて、存在しているものどもが数的に無限であることを論証したのである。しかし、そのような論証として、目下の著作断片を理解するのは、それほど容易なことではない。

あえて考えてみることにしよう。シンプリキオスの指摘が正しければ、存在しているものどもを二つに分けると、分けられて「存在しているものどもの間には、常に他のものどもが存在している」ことになる。とはいえ、見てのとおり、これはまったく意味不明の指摘というほかない。なぜなら、存在しているものどもを二分割したその切断面が、もしも分けられて存在しているものどもの「間」であると理解してよいのであれば、この意味での「間」に他のものどもが存在しているとは考え難く、むしろ何も存在していないと考えるほうが自然だからである。しかも、シンプリキオスがゼノンの著作から引用している箇所には、二分割や分割への言及がまったく見当たらない。そもそも、ゼノンが「このように数的無限もまた、二分割にもとづいて論証した」と指摘しているのは、当人ではなくシンプリキオスである。かれは「ゼノンの著作そのもの」から引用すれば事足りるので、多くを語るまでもないと記した後、実際にその引用を行なっていた。この点から推定すると、当の引用箇所を一読すれば、多が数的に無限であることもまた二分割に基づいて論証されていると、読者は即座に理解できなければならないのである。では、一体どのように、ゼノンの議論を理解すればよいのだろうか。シンプリキオスにとっては自明であったために、解説が完全に省かれている論証のプロセスを、ここでは再現しなければならない。これはかなり困難な試みであるように思える。

ところが、意外にも、上述のような不可解さを消し去るための手掛かりは、上掲断片の後半に展開されている議論のなかで、少なくとも通常の理解からすると、根拠（理由）と根拠（理由）づけられる事柄が逆になっている事実そのものにほかならない。

さて、大きさをもっているものが二分割される論証は、ゼノンによってどのように展開されていただろうか。前方に大きさをもっているものは「それ自身の〔大きさの〕いく分かを前方にもっていることになる〔直説法未来〕」。そして、かれによれば、このことを「一度だけ言う〔アオリスト不定詞〕のと常に言っている〔現在不定詞〕のとはまったく同じこと」であった。たしかに、いま検討している断片後半では、存在しているものども一般の範囲で議論されている。しかし、イメージしやすいように、それらのなかでも前方に大きさをもって存在しているものが二分割される設定で考えてみたい。

ここではまず、前方に大きさをもって存在しているものが、二つ並んで

互いに向かい合っているとしよう。すると、前方に大きさをもっている一方のものは、それ自身の大きさのいく分かを前方にもっていることになる（直説法未来）ので、前方と後方に二分割されて複数になり、二分割が進行するさなかで常に、その前方もまた前方に大きさをもっているものであるから、それ自身の大きさのいく分かを前方にもっていることになる（直説法未来）。さらに、前方に大きさをもって存在している他方のものも、まったく同様の理由で二分割されて複数になる。そして、これを一度だけ言うのと常に言っているのとはまったく同じことであり、前方に大きさをもって存在しているもの同士の間には、前方に大きさをもっている他のものどもが常に存在し、また、それらの間にも再び、前方に大きさをもっている他のものどもが存在している。しかも、以上のことは、前方と後方および前と後が相対化されて、一方に対する他方の優越性が排されると、大きさをもって存在しているものども一般でも成り立ち、ゼノンが述べていたように「存在しているものどもの間には、常に他のものどもが存在し、また、それらの間にも再び、他のものどもが存在している」のである。

シンプリキオスの指摘が正しいとすれば、存在しているものどもの数的な無限性を根拠（理由）づけていた箇所、すなわち「なぜなら、存在しているものどもの間には、常に他のものどもが存在し、また、それらの間にも再び、他のものどもが存在している〔直説法現在〕からである」は、第2節で検討した大きさの二分割から得られた成果を前提にしていたのである。通常の理解からすると、断片後半の議論では、根拠（理由）と根拠（理由）づけられる事柄が逆になっているように思えた。この奇妙さは根拠（理由）のさらなる前提――大きさの二分割――に認められた特徴の残響だともいえるだろう。いずれにせよ、本節で解読を試みている著作断片でも、大きさの二分割から得られた成果を前提にして、ゼノンが論証を進めていることから、この断片も基本的には、第1節と第2節で解読してきた諸断片と同じ論証形式に従っている。それはすなわち、必然的に導かれる未来の事柄をもとに、現在時制で表現される「今この瞬間」に進行中の何かが否定されるといった、あるいは現在時制で表現されていることが根拠づけられ、そのことが実情と照合されるといった、一種独特の論証形式にほかならないのである。

次に、上掲の断片を吟味検討する下準備として、多（複数形）の数に具体的なイメージを与えておきたい。まず、それは複数の何かであるため、

まとまった全体を基準でもある１とすることにしよう。これを二分割すると、多の数は２になり、大きさの違いは数に影響しない。それらのうち、一方だけを二分割すれば、多の数は３となる。さらに、それらのうちのどれかを二分割すると、多の数は４になり、以下同様、多の数は二分割によって、いくらでも大きくなる。ようするに、多（複数形）の数は分割するごとに増えることになる（直説法未来）ので、これを一度だけ言うのと常に言っているのとはまったく同じことである。こうして、多（複数形）は二分割した回数に１を加えた数だけ存在し、それらは存在している数だけ存在しているのであり、常にそれら自身より多くも少なくもない有限の数だけ存在している。しかし、当初の設定で、まとまった全体としての多（複数形）を基準でもある１としたのは、便宜上のことでしかなかった。また、現在時制で表現される「今この瞬間」に続行中の分割は、以前と以後のいずれにも接続している動作の「真っ只中」にある一部分にほかならない。したがって、多（複数形）は基準の１とされた当初、それまで分割がなされてきたのだから、すでに膨大な数に上っているとも考えられる。さらに、存在している多（複数形）のいずれかではなく、すべてをそのつど二分割しているのであれば、多（複数形）の数は分割のさなかで無限になるだろう。二分割にもとづく論証はこのように具体化できそうである。しかし、ここで具体化したイメージを参考にしつつも、論証の妥当性を断片で語られているとおりに検討することにしたい。

ゼノンは著作断片の前半で、もしも多（複数形）が存在しているなら、多は「有限であるだろう」と論証してから、後半で次のように述べていた。「もしも多〔複数形〕が存在しているのであれば、存在しているものどもは無限である」。すでに指摘したとおり、主節（帰結節）の主語は従属節（条件節）の主語と異なって、存在しているものどもである。このため、厳密に検討するためには、多（複数形）と存在しているものどもの関係を明確にしておかなければならない。シンプリキオスは著作から引用する直前に「多〔複数形〕が存在しているのであれば、それらは有限かつ無限であることを再び論証しながら、ゼノンはそれらのことを、次にような言い方で書き記している」と解説していた。そして、仮にこれが正確な解説であれば、断片の後半は多（複数形）が無限であることを含意していなければならない。おそらく、多（複数形）は存在しているものどもの一種であり、存在しているものどもに含まれるのであろう。この点をより明確

にするために、存在しているものどもと多（複数形）との関係を、具体例で考えてみることにしよう。

ギリシア語の《εἶναι》は「存在すること」を意味するだけでなく、たとえば「真実であること」「妥当であること」「成り立つこと」その他、様々なことを意味しうる[(6)]。日本語でも「法則が存在する」と表現された場合、法則が成り立つこと、あるいは法則が支配していることを意味する例からすれば、これはさほど奇妙な言語の慣用でも、ギリシア語の破格さでもなさそうである。しかし、この点はともかく、存在しているものどもの範囲には、われわれの感覚が捉える事物的な諸対象はもとより、幾何学で研究される思考上の諸対象なども含まれることにする。ただし、線や面や図形などを「存在しているものども」と表現すると、感覚的な諸事物のように存在している諸対象であるかのような意味合いが、特に日本語ではどうしても伴いがちであるため、事物ではないものも含まれている全体を、より単純に「ものごと」と表現することにしたい。また、ゼノンの議論では空間的な大きさの二分割が基本とされていたのに対して、それとは異なる意味の二分割をもとにして考えてみることにしよう。

ここでは、ありとあらゆる形状と大きさの三角形を、多（複数形）の一例とする。もしもそのような多（複数形）が存在する、あるいは成り立つのであれば、三角形すべての集合をかたちづくるこの多は、ものごとの一種であり、三角形でないものごとから、言い換えれば三角形を除くものごとから明確に区別される。このため、あらゆるものごとからなる全体は、三角形の集合である多（複数形）と三角形でないものごとへ二分割されているといってよい。しかし、あらゆる形状と大きさの四角形を集めた集合も、三角形とは異なった多（複数形）の一例であり、四角形でないものごとから明確に区別される。そして、この場合もまた、あらゆるものごとからなる全体は、四角形の集合である多（複数形）と四角形でないものごとへ二分割されている。さらに、三角形でも四角形でもないという意味で三角形と四角形の「間」には、両者のいずれでもない他のものごとが必ず存在し、あるいは成り立ち、以下同様に、五角形、六角形、…という多（複数形）が存在する、あるいは成り立つのであるから、ものごとの数は無限でなければならない。問題の断片後半はこのようにも理解できるのではないだろうか。

ありとあらゆるものごとのなかには、幾何学の諸対象からなる多（複数

形）の他にも、たとえばポチやシロなどを集めた犬という多（複数形）が存在し、あるいは成り立ち、ものごとの全体は犬という多（複数形）と犬でない他のものごとへ二分割される。また、ミケやタマなどを集めた猫という多（複数形）は、猫でない他のものごとから区別されるので、あらゆるものごと全体が、この場合は猫という多（複数形）と猫でない他のものごとに分割されるだろう。さらに、犬でも猫でもないという意味で犬と猫の「間」には、馬や鹿などの多（複数形）が存在し、あるいは成り立つだけでなく、犬と馬の間にも、馬と鹿の間にも、必ず他のものごとが存在ないし成立する。より抽象的な例で考えると、事物の性質として理解されている様々なものごとが、ゼノンの議論にはよく適合する。たとえば、硬さという性質は細かく区別するに応じて、無限に多様な硬さの程度がありうるため、複数のものごと――程度ないし度合い――からなる多の典型である。そして、あらゆるものごと全体は、硬さという多（複数形）と硬さでない他のものごとへ二分割され、同様にまた、冷たさという多（複数形）と冷たさでない他のものごとへ二分割され、硬さでも冷たさでもない両者の間には、軽さ、滑らかさ、明るさなど、必ず複数のものごと――程度ないし度合い――からなる多が存在ないし成立するのである。

あらためて確認すると、ゼノンの著作から引用されたと推定される断片では、次のように述べられていた。「もしも多〔複数形〕が存在しているのであれば、存在しているものどもは無限である。なぜなら、存在しているものどもの間には、常に他のものどもが存在し、また、それらの間にも再び、他のものどもが存在しているからである」。そして、シンプリキオスの解説が正確であれば、この論証は二分割にもとづくのであった。さらに、第 2 節で検討した断片との内容的な関連から、ゼノンは多と存在しているものどもの数が無限であることを、空間的な大きさの分割にもとづいて証明していたと推察される。しかし、ゼノン当人の意図を括弧に入れ、しかもギリシア語の「存在する」という動詞の広範な意味を考慮して、上掲の引用箇所が読み解かれる場合、前段までにあげた三角形や犬や硬さの例で理解される可能性もあり、むしろそのような理解の仕方は、空間的な大きさをもつ諸事物に限定した理解よりも、格段に叙述どおりであると言えるのではないだろうか。いずれにせよ、目下の断片で展開されている論証もまた、幾何学の対象、生物の種、あるいは事物の性質といった例に当てはめたときも含めて、述べられているまま厳密に成り立つと解釈でき

る。それどころか、すでに検討した諸断片と同様、この断片もまた厳密な理論の構築にむけて素通りできない問題を、すなわち、ものごとが存在する仕方や成り立ち方といった重大な問題を浮かび上がらせるのである。（つづく）

註

（4）Cf. Robert B. Todd, *Themistius*, Univ. of British Columbia 2003, p. 59.

（5）H. W. Smyth, *Greek Grammar*, revised by G. M. Messing, Harvard UP 1984, p. 535, n. 2361［項目番号 2361］.

（6）Cf. Charles H. Kahn, *The Verb 'Be' in Ancient Greek*, Dordrecht-Boston: D. Reidel Publishing Co. 1973; rep. Indianapolis/Cambridge: Hackett Publishing Co. Inc. 2003, esp. pp. 331–333.